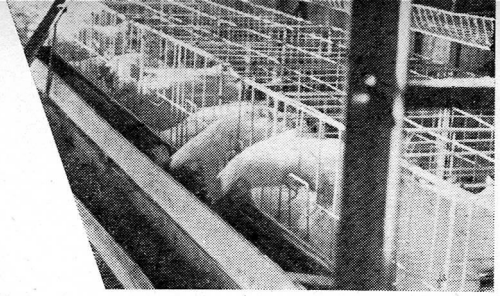

新しい養鶏経営法 (2)

鎌田浩一

飼料の合理的な給与について

これからの養鶏経営を有利にすすめるためには、卵の生産費をできるだけ引き下げてゆくことが大切である。

なかでも、飼料費は支出の内で七〇～八〇%を占めており、生産費を切りつめるためには、飼料を効率的に用いて、安い生産費で、より多くの卵の生産をあげることが必要とされるのである。

そこで、本稿では飼料の合理的な給与法について考えてみることにする。

一　給餌の回数と給与量について

○給餌の回数

飼料の給与方法には、不断給与（飼料を一定の容器に数日分を入れて、鶏に自由にたべさせる方法）と、回数給与（一日数回に分けてあたえる方法）とがある。

従来は後者の回数給与法が主として行なわれていたが、最近は大規模養鶏が発達するにつれて、労力を節約するために次第に不断給与を行なうものがふえてきている。

(イ)　不断給与法

不断給与の場合は、ホッパー（不断給餌器）という給餌器の中に、通常一週間分の飼料を入れておいて鶏に自由に採食させるのであるが、この場合飼料をムダにしないように注意が肝要である。特にネズミによる被害が多いので、給餌器は天井から吊り下げる形式のものがよい。

不断給与の場合は、飼料は完全配合の形で、しかも粉餌として与えることになるので、鶏の嗜好の面から練餌の場合に比較して劣るので、不断給与だけにしないで、不断給与と回数給与とを併行して行なうのがよい。

(ロ)　回数給与法

一日数回にわけて、飼料を給与する方法である。不断給与に比較して、労力がかかるという欠点があるが、反面において、飼料を適量あたえることができ、飼料のムダがない。飼料は練餌等と混ぜて与えることができて、鶏の健康増進に役立つ。給餌の際に鶏を観察することができて、鶏の健康状態や、駄鶏の淘汰ができる等の長所がある。

次に一日の給与回数を示すと、

ひなの場合

餌付け時から一ヵ月まで五～六回、一ヵ月以降三ヵ月まで四～五回、三ヵ月以降は三～四回

成鶏の場合

普通一日三回を標準とするが、冬季は上り餌として、夕方さらに一回粒餌を給与する場合がある。

二　飼料の給与量

飼料の給与量は、鶏の品種、産卵状況、体重、鶏の健康状況、飼料の種類などによって異なってくる。

そこで、普通の配合飼料を用いた場合について考えてみると、産卵鶏の飼料の一日一羽当たりの給与量は、一〇〇～一三〇g程度が標準である。

むろん、給与量は、季節により、品種により異なってくるので、季節別の産卵鶏の給与量の一例を示すと第一表のとおりである。（註　この場合、産卵率は六〇～七〇%程度とする。）

第一表　産卵鶏飼料の給与量の一例

品種	冬	春はまた秋	夏	休産中
白色レグホーン種	105～112g	105g	98g内外	90g内外
名古屋種	112～131	112	112 〃	93 〃
横斑プリマスロック種	112～131	112	112 〃	105 〃

三　飼料配合の要領

飼料の配合というのは、いろいろの飼料を混ぜ合わせて、それぞれの飼料の欠点を補って、鶏が必要とする養分を十分にもった飼料を作ることである。

そこで、実際に養鶏家が飼料を利用する場合に、市販の配合飼料を購入する方が有利か、あるいは自家配合の飼料を作った方が有利かという点であるが、育雛飼料の場合は、その配合が非常に難しい点があるので、信用のおけるメーカーから完全配合飼料を購入する方がよいと考えられるが、産卵鶏（成鶏）の場合は、それぞれの立地条件によって、完全配合を購入する場合と、自家配合をする場合とがある。たとえば穀類や、魚粉等の単味飼料が自家生産できる場合などは、当然自家配合を考えるべきである。

また、飼料価格との関係で、市販の配合飼料を主体として、一部自家生産飼料を用いて、飼料費の節約をする場合もある。

次に飼料配合について、その要点を述べてみる。

○配合の材料

○配合の材料は種類を多く用いること。

おのおのの飼料は、それぞれ成分上の特長と欠点があるので、なるべく多種類の飼料を配合するのがよい。

例えば、普通、飼料配合の場合に、飼料の種類としては、穀類、ぬか類、魚粕類（蛋白質飼料）、無機物、ビタミン類をそれぞれ適量配合するわけであるが、この場合同じ穀類を用いる場合でも、小麦だけを用いるよりも、小麦とトウモロコシの両方を用いる方が成分的によい配合ができる。

同様に、ぬか類も米ぬかのみを用いるよりも、米ぬかとフスマを用いる方がよい。

このように、配合する飼料は、なるべく種類を多く用いるのが、飼料配合の要領である。

○魚粉や魚粕などの蛋白質飼料を少なくとも一〇%以上加えること。

魚粉や魚粕、生魚屑、大豆粕、さなぎ粕

などは蛋白質の多い飼料で、卵の生産のためには欠くことのできない飼料である。

配合する割合は、全体の飼料の一〇%から二〇%程度を与えることが必要で、この割合は、鶏の産卵状態によって適宜に増減をする。

即ち、鶏の産卵状態と飼料中の蛋白質の必要量との関係を調べてみると、次表のとおりである。

産卵率	飼料中の粗蛋白質量
100%	22 g
90	20
80	19
70	18
60	16
50	15

このように、普通の産卵鶏は、一五%から、多産鶏で二〇%内外の蛋白質を必要とする。

そこで、これだけの蛋白質を飼料として与えるためには、魚粕の量をどのくらい配合したらよいだろうか。

大体の目安としては、普通の産卵鶏（産卵率六〇%内外）の場合は魚粕を全体の飼料の一〇%程度、多産鶏（産卵率七〇%以上）の場合は、魚粕は一五～二〇%程度を配合するのがよい。（魚粕の代りに生魚屑を用いる場合は魚粕の四分の一程度の価値と考えればよい。）

次に魚粕を多目にした場合と、ひかえ目にした場合の具体的な飼料配合の例は次表の通りで産卵率が九〇%程度の多産鶏では、魚粕を多目にし、七〇%程度の産卵鶏には表（ ）内の如く魚粕をひかえ目にする。

魚粕の価格は高いので、なるべく節約をして産卵状況に見合うように、合理的な配合をすることが肝要である。

○飼料の配合は急変しないこと。

飼料を変更する場合は、急にかえないで一週間から一〇日くらいかかって徐々にかえるようにするのがよい。飼料を急変すると、採食量が減って、そのために産卵に影響を与える。

とくに、環境の不良な時期や管理のよくない場合にはその影響が大きいので注意しなければならない。

○一定量の無機物を与えること。

無機物は身体の発育、骨格の構成などに必要なばかりでなく、卵の生産のためにも欠くことができない成分である。

とくに、カルシウムが不足すると、卵殻がうすくなり、更に不足をすると産卵率が低下する。夏は卵殻が薄くなりやすいのでカルシウムに不足のないように注意をする必要がある。

カルシウムとしては炭酸カルシウムを飼料中に四～五%配合するほか、カキガラを自由に食べさせるようにするのがよい。

カルシウムの他には、食塩が不足し易い。食塩は全体の〇・五%を配合する。

ケージ、バタリー飼育の場合は、土にふれないので、腐植土などを与えるのがよい。

	配合量	飼料中の粗蛋白質含有割合	1飼料中の粗蛋白質量
	g	%	g
小麦	15(10)	×12(12) =	1.80 (1.20)
とうもろこし	15(20)	× 9(9) =	1.35 (1.80)
魚粕	15(10)	×60(60) =	9.00 (6.00)
米ぬか	20(25)	×15(15) =	3.00 (3.75)
フスマ	30(30)	×16(16) =	4.80 (4.80)
無機物 ビタミン類	5	× 0 =	0
	100		=19.95(17.55)

（ ）内　魚粕をひかえ目にした場合の配合

○ビタミン類

産卵鶏で最も不足し易いのは、ビタミンAとD_3である。またリボフラビン（B_2）も不足し易いビタミンである。

これらの補給のためには、AD_3やB混合剤を与える。

とくにケージ飼育の場合にはこれを補給する必要がある。

○小石を与えること。

小石は飼料の消化をたすけるために必要である。とくにケージ飼育の場合にはこの補給を忘れてはならない。

四　飼料を有効に利用するための工夫

飼料費が支出の大半を占めることは前述のとおりであり、飼料の有効な利用は養鶏経営を改善するために極めて大切なことである。そこでどんな点に工夫をしたらよいか、二、三の点について考えてみよう。

(イ)　産卵能力のよい鶏を飼うこと。

同じ栄養の飼料を与えた場合に、体重の差がないとすれば、身体の維持に必要な飼料費は同じであるが、多産鶏の方が卵の生産のために必要な飼料費は駄鶏に比較をして全体として安い飼料費ですむという調査がされている。

したがって、産卵能力の高い鶏を飼養するために、よいふ化業者のひなを購入することと同時に駄鶏の淘汰を厳重に行なうようにすることが大切である。

(ロ)　小型の鶏を飼養すること。

鶏の身体の維持に必要な飼料は、体重に比例して、体重の重い鶏は、小型の鶏よりも飼料を多く必要とする。そこで産卵状態が同じであれば、大型の鶏よりも、小型の鶏の方が飼料を有利に利用することができることになる。

ただ余り小型になり過ぎると、小卵になり易い欠点があり、またセンイ類の多い自給飼料を多く与える場合は小型の鶏は不適当である。

(ハ)　飼料のムダを防ぐこと。

飼料のムダを防ぐためには、飼料の与え方や給餌器の構造を工夫することが必要である。

例えば、給餌器の深さは、浅い給餌器では飼料をかき出してムダが多い。また給餌器の大きさの割に多量の飼料を入れておくとこぼしやすい。

そこで給餌器の上に山型の格子をつけたり、給餌器の上端に縁をつけて飼料のこぼれをふせぐように工夫するのがよい。

飼料の与え方についても、多量を一時に与えすぎて、残量がでると、練餌の場合は腐敗し易く飼料がムダになる。

(ニ)　飼養環境を改善すること。

鶏舎の温度や湿度、日当たりの状況、坪当たりの羽数などは産卵率に影響を与え、飼養環境が悪ければ、それだけ産卵率も低下することになり、飼料が不経済である。

とくに、低温の場合は、体温を維持するために特別に飼料のエネルギーが消費されることになるので、冬期は防風、防寒につとめて、飼料を有効に利用するように工夫することが大切である。

反対に夏季は暑さのために採食量が減る傾向があるので、産卵を維持するためには、蛋白質、ビタミン類、その他栄養の高い飼料を多目に与えることが飼料を有効に利用することになる。

（以上）